

# 舟長

## ひとくごと

34

### 齊藤讓

月見れば  
ちぢに物こそ悲しけれ  
わが身一つの  
秋にはあらねど

この和歌は、大江千里の有名な一首である。今年も廻り来た秋は、静かに深まり、まるでこの歌の心象風景を彷彿とさせるような、どこか虚ろで物悲しい気配を、辺り一面に漂わせている。これこそが、爽やかに澄みきった空気と、鈍く物憂い光の陰が織りなした奏でる、繊細な秋の日のメロディである。

この和歌は、大江千里の有名な一首である。今年も廻り来た秋は、静かに深まり、まるでこの歌の心象風景を彷彿とさせるような、どこか虚ろで物悲しい気配を、辺り一面に漂わせている。これこそが、爽やかに澄みきった空気と、鈍く物憂い光の陰が織りなした奏でる、繊細な秋の日のメロディである。

が住まいする聖地のような清らかさである。いつしか私も、雑念が拭い去られ、心が鏡のように静かに澄みわたる思いであった。神秘とは、まさにこのようなことをいうのであろうか。言葉や感情は無用の長物と化し、ただ沈黙だけがこれに応えるのみである。いま私がながめている月を、曾っては古代人も、あるいは中世、近代に生きた人々も、同じようにながめてきたこと

# 月光

頭を挙げて 山月を望み  
頭を低れて 故郷を思う  
静夜の望郷の思いを表現したものであり、私の大好きな詩の一つである。これには、作家である井伏鱒二の素晴らしき諷刺がある。

古今東西多くの人々が、月を愛で、月と語る中から素晴らしい詩や曲が生まれ、後々の世まで歌い語り継がれているのも、月が人間の心の奥底に潜む風流心をかきたてる魅力を持つからにほかなるまい。